

Vol.35

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

◆ 目次 ◆

| | |
|------------------------|------|
| 八幡に生きる | … 1 |
| 先史・原史時代の八幡 | … 2 |
| 推しの一冊 | … 6 |
| 健康な土壌はどのように 作生成されるか | … 10 |
| 八幡 俳句歳時記 | … 11 |

八幡に 活きる

子育て支援の ハブセンターになる

おひさまテラス代表

大西美和子



知る・見る・考える
八幡市民の
交流誌

きずな

「おひさまテラス」は、男山地域まちづくり連携協定で2014年に設立された「地域子育て支援施設」でA団地集会所内にあります。過去に京都府子育て支援「地域貢献部門」表彰も受けられました。地域の生後1カ月から就学前の子どもたちと、保護者の方が利用されています。

テラスの始まりは、大西さん

が子育ての中で感じた、言葉にしづらい寂しさでした。以来「出会いが生まれる場所」＝「子育て支援のハブセンターになる」ことをめざし、親子・保護者と子どもが安心して過ごせる居場所、孤立を防ぐ交流の場として、一時預かりなど具体的な支援、イベントの開催(親子クッキング、クリスマスパーティー、栄養士さんによるお話し、また療育支援といった「現場支援」も丁寧に積み重ねてこられました。

親子(保護者と子ども)が安心して出会い、支える環境を作り、①安心(誰にも否定されない、比べられない、弱音をはいていい)②つながり(ママ同士、親とスタッフ、地域との緩やかな縁)③あたたかさ(実家のような感覚、「ただいま」と言える雰囲気、この3つを核に居場所であり続けることを理念にされています。誰かと一緒に笑えたら、「大丈夫」と言い合えたら、そんな場所があれば、きつと救われる人がいる。その思いから、この場所は生まれました。そして今、13年目を迎え、支えられた方が、支える側へと進化

しています。

運営していて良かったと思うことをお尋ねすると、①空気が変わる瞬間が見られること(ママの表情の変化や笑顔が見られた時・次にまた来てくれた時)②「一緒に喜べる」瞬間に立ち会えること(できた！の瞬間・初めての一步・初めての友達・ママが涙ぐみながら話せた日)③寂しさが循環しなかったこと(相談できる相手ができた・「また来ます」と言ってくれる人がいる)④地域の温度を少し上げていること(大きな改革でなくても、誰かが孤立せずにすんだ・誰かが救われた・誰かの子ども時代が少し明るくなった)とのこと。

しかし、これまでの道のりは順風満帆だったわけではない。「最初は困難ばかりでした。しかし、たくさんの方々を支えられ、これからこの場所が必要になることを信じて、みんなで続けてまいりました。最初3人から始めたボランティアでしたが、仲間も増え7人でのローテーションで、週3、4回の開催ができるようになりました。一方で10年続ける中、スタッフ

の高齢化など課題が出てきました。次第に続けることの難しさを感じるようになり、八幡市子育て支援課の方々に相談に乗っていただきました。そして、それまでの利用者であった今の『おひさまテラス』スタッフと出会うことができました。『できた』がいっぱい！社会、行政が一つになって今の『おひさまテラス』があると思います。これからも、今の『あったらいいな』を見つけて、寄り添える子育て支援施設『おひさまテラス』であり続けたい。『おひさまテラス』に来ると、みんな優しくなって協力的になってくれる、そんな気がしています」と、大西さんは熱く語る。

今後の抱負は、「これからも無理せず、背伸びせず、目の前の親子(保護者と子ども)と丁寧に向き合いながら、『ここにきてよかった』と思ってもらえる居場所を守り続けます。バトンを渡し、続けていける形を作ること、これが今の私に託されたことだと思っています」と、まっすぐに未来を見据えて話された。(文責：中村たかし)

先史・原史時代の八幡



濱田 博道

古墳時代

〜八幡市域の古墳はいつ造られ、いつ終りを迎えたか〜

一、はじめに

弥生時代後期（1世紀〜3世紀）頃から北九州・山陰・山陽・近畿などの各地で、力を蓄積してきた首長の大きな墳丘墓（土の高まりをもつ）が、地域により形は違う）が造られはじめます。3世紀半ば頃からは、

八幡市域の主な古墳



主に西日本で鍵穴の形をした大規模な前方後円墳が築かれるようになります。この3世紀半ば頃〜7世紀頃までの時期に土を高く盛り上げて造られた有力者の墓は古墳と呼ばれます。その種類は形と大きさにより格付けされ、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などに分かれますが、これらの古墳が造られた350〜400

0年間で古墳時代です。古墳時代は前期（3世紀半ば〜4世紀）、中期（4世紀終り頃〜5世紀末）、後期（6世紀〜7世紀）の3期に分けて考えることが多く、初期の前方後円墳の中で最も規模の大きいものが箸墓古墳

（奈良県桜井市、全長280m）です。奈良県大和東南部に所在しますので、この地方が当時の政治的連合の中心（ヤマト政権「ヤマト王権」という）と考えられています。

二、市域での最古の墓

弥生中期の方形周溝墓群

（美濃山幸水他）

寄り道になりますが、八幡市域の古墳時代を考える前に市域の最も古い墓について考えてみます。

市域で発掘された最も古い墓は弥生中期の幸水遺跡（美濃山幸水）から検出された方形周溝墓群（18基、中期後葉、2100年程前）です。幅1m前後の溝で方形に区画され、低い墳丘をもち、方形内に埋葬施設があるので、その名がついています。隣接する金石衛門垣内遺跡（美濃山井ノ元）から弥生中期の石器・石製品・土器が多数出土しており、幸水遺跡の方形周溝墓群はこの地域の墓域と考えられています。また内里八丁遺跡（内里八丁・内里日向堂・内里今福他）からも、弥生中期頃からはじまる水田耕作跡の遺構が検出され、その近辺の遺構から石器・石製品（石包丁、砥石など）・土器が出土し、方

形周溝墓も検出されています。埋葬施設の木棺に直接埋葬され、周囲の溝や施設内からは壺・甕・高坏等が出土しています。（京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書第30冊内里八丁遺跡Ⅱ』。一般に方形周溝墓は弥生時代から古墳時代初期まで造られますが、高い墳丘がなく、主に弥生時代の墓なので古墳とはいきません。市域では弥生後期、平地や丘陵上に多くの集落（丘陵上の集落＝高地性集落）ができ、狩猟や水田耕作が営まれ、男山指月の式部谷遺跡からは後期後半の突線鈕式袷袢文銅鐸（式部谷銅鐸、2世紀、後期では南山城地域唯一の銅鐸）が出土しています。しかし、気候変動による大規模な洪水などに襲われ、離合集散したり、また統合を繰り返しつつ、古墳時代を迎えます。

三、市域の最も古い古墳

☆中ノ山古墳（男山弓岡・石城・吉井）

こうした弥生時代のあと、八幡市域ではいつ頃から、どんな古墳が造られたのでしょうか。最近まで市域の最も古い古墳は八幡茶臼山古墳（男山笹谷、前方後方墳、全長50m、消滅）とされてきましたが、現在では中ノ山古墳（男山弓岡・石城・吉井、消へ

◀滅・形・大きさ不明)が最古の古墳といわれています(京都府教育委員会『綴喜古墳群』2022)。著墓古墳が造られてから60〜90年程後の4世紀中葉の築造です。1969年の京都府教育委員会の調査で、中ノ山からその埴輪片が採集されましたが、古墳があるときまでは確認出来ませんでした。しかしその後、『考古学雑誌』(1919)の京都大学島田貞彦氏論文地図中に「中ノ山古墳」の記述が認められること、郷土史家西村芳次郎氏『八幡史蹟名勝誌』(1928)にも記載があること、京都工芸繊維大学所蔵・中ノ山古墳出土遺物(車輪石・石釧「ともに腕輪・ブレスレット」他)の検証などから中ノ山古墳の存在がほぼ確実になりました(京都府教育委員会『綴喜古墳群』2022)。

さらに興味深いのは、島田貞彦氏論文の地図に中ノ山古墳以外にも近辺地域に太古山古墳、モリ山古墳、また名前の無い古墳印等が存在することです(地図参照)。

これらの古墳について興味がわきますが、地域の開発が進み、古墳は現在確認できません。八幡最古の古墳の近辺にいくつかの古墳が存在することは市域での古墳時代初期の勢

中ノ山付近にあった古墳



力やその所在地を考える上からも重要です。中ノ山古墳の確認により、八幡地域の古墳築造開始は従来(古墳時代前期後葉)の説より数十年遡り、前期中葉と考えられています。

☆八幡茶臼山古墳(消滅、男山笹谷前方後方墳、全長50m)

続いている築造とされる八幡茶臼山古墳も男山団地の造成により、現在は消滅しています。築造は最近の埴輪やその配置状況などの研究から従来より遡り、古墳時代前期中葉(4世紀中葉)頃とされています(宇野隆志「八幡茶臼山古墳出土の埴輪に

ついて」『山城郷土資料館報』第26号)。その形状は前方後方墳で、埋葬施設の石棺は舟形石棺(阿蘇溶結凝灰岩製「阿蘇黒石・氷川産」、現在京都大学文学部所蔵)です。近畿地方では最も古くに九州から入ってきた石棺で注目に値します。日本地図を広げて九州から大阪までの海を見ると、女界灘、響灘、周防灘、伊予灘、安芸云灘、燧灘、備後灘、水島灘、播磨灘、明石・鳴門海峡、そして神戸の西灘・東灘と海の難所が連続しています。今から1600年程前、こうした難所を乗り越え、さらに淀川を遡上って、八幡茶臼山古墳まで500km以上の距離を石棺が運ばれたわけです。なぜ在地の石を使わず、九州から運んだのか。九州からは大勢の人を使って、各地40〜50の豪族が(船案内・石棺運搬・搬入・宿泊地などに)関わったといわれます。彼らと関わりを持つ八幡茶臼山古墳の被葬者はどんな人物だったのか。その力をどうやってつけたのか。ヤマト王権との関わりはどうか。興味は尽きません。

四、大型古墳築造の時代

続く古墳時代前期中葉〜末頃が八幡地域で最も活発に大型古墳が造られた時期といえます。八幡茶臼山古

墳に続き、八幡西車塚古墳「前方後円墳、120m、八幡大芝」、ヒル塚古墳「美濃山ヒル塚、一辺52m、造出付方墳、三段築成」、石不動古墳「前方後円墳、88m、八幡石不動」、八幡東車塚古墳「前方後円墳、90m、八幡女郎花」などが次々に築造されます。この頃の古墳は格付け上位の前方後円墳・後方墳が多いです。これらの古墳はヤマト王権中枢の古墳全長が200m級なのに対し、全長90m〜120mで、その3分の1〜2分の1近くの全長です。方墳のヒル塚古墳も大型です。三段築成、埋葬施設床上に一面に朱色のベンガラを敷き、朝鮮半島との関わりを示す渦巻飾付鉄剣などが出土しており、地域の王の古墳といえます。

続く4世紀末〜5世紀初めにかけても、美濃山王塚古墳(帆立貝形前方後円墳・美濃山大塚・75m以上)、御家通1号墳(方墳・20m・美濃山御家通)、御家通2号墳(円墳・22m・美濃山御家通)などの古墳が築造されます。

2021年(令和3)、京田辺市で新しく天理山古墳群(前方後円墳2基、前方後方墳1基、4世紀代の築造、京田辺市新山垣外地内)が発見されました。その結果、北の石不動古

◀墳から南北に連なる木津川左岸の古墳群は奈良盆地と列島各地を結ぶ水運の要衝にあり、木津川によりその交易の一端を担った集団の首長の墓域と考えられ、綴喜古墳群(40数基)と命名されました。そして古墳時代前期(4世紀)の5基が国史跡に指定されました。八幡市の八幡西車塚古墳はその国指定史跡古墳の一つです。山城地域ではこれまで長岡京市・向日市の乙訓古墳群で13基、城陽市・木津川市の久津川古墳群で150基中5基が国指定史跡でしたが、新たに木津川左岸の古墳群も国指定史跡となりました。

これらの地域は弥生時代以来、淀川・木津川・桂川・宇治川を通して東西南北に通じる水運・陸運の要衝でした。

五、中期中葉〜後期の古墳

しかし、市域の古墳築造はここままで、古墳時代中期になると、ヤマト王権中枢では400mを超す古墳、列島各地でも大古墳が次々と築造される反面、市域では中期中葉から目立った古墳はほとんど築造されなくなりません。それはなぜか。中期以降、木津川対岸の城陽市・久津川古墳群

の地域では大溝の整備などで生産力が増強し、覇権が移っていき、大型古墳の造営が行われます。一方、八幡市域は標高・排水・その広さなどの点で生産地の開拓などがうまく進まなかった、ヤマト王権との関係も良好とはいえなくなってきたからともいわれています。

そして王権から古墳築造の強い規制のかかってくる後期・古墳時代終末期(飛鳥時代)になると、八幡・京田辺市域では新たに新興勢力(農民層か?)が台頭するの、墳丘の無い古墳である横穴墓が急増し、約600基(推定)ほど造られるのです。

六、市域の主要古墳紹介

最後に市域の主な古墳について簡単に見ておきたいと思えます。

☆ヒル塚古墳(美濃山ヒル塚、一辺52m、造出付方墳、三段築成)

4世紀中葉の築造。埋葬施設3基。粘土槨(2基)と埴輪棺(1基)。粘土槨内には竹割形木棺(水銀朱)。床下は鮮やかな朱色のベンガラ塗布。(八幡市立ふるさと学習館展示)。副葬品として渦巻飾付鉄剣1、鉄槍49、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、長剣1、短剣39、

鉄刀1、鉄斧、鉄鎌、鉄鉈、蔵手刀子くらでいりていす鏡1(方格規矩鳥文鏡)、鏡片1などが出土。渦巻飾付鉄剣は、日本の古墳では類例がなく、朝鮮半島の伽耶地方に由来が求められ、大変貴重な遺物です。

☆八幡西車塚古墳(八幡市八幡字大芝、前方後円墳「木津川左岸最大」、全長約120m、国指定史跡)

八幡市内の大型古墳で形状を留める唯一の古墳で、木津川左岸最大。後円部墳頂には、廃仏毀釈により石清水八幡宮から移された八角堂が建っています。前方部を北に向き、後円部径約70m。周堀跡、遺存。埋葬施設は後円部南側に堅穴式石室、八角堂下に木棺直葬の施設の2つが確認されていますが、中央部にもその存在の可能性が指摘されています。埋葬施設の一つ、堅穴式石室は1902年(明治35)の土取工事によって露出し、遺物が出土。水成岩の割石小口積み構造で、横270×幅60×深さ約100(cm)。副葬品として5枚の鏡(龍虎鏡・

八幡西車塚古墳出土の鏡

画文帯神獸鏡 2世紀後半 中国鏡

三角縁神獸鏡 3世紀後半



面径14.5cm



面径21.7cm

東京国立博物館所蔵

ColBase.nich.go.jpより

変形六獸鏡・変形方格四獸鏡・三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡)の他、碧玉製車輪石10・石釧3・鍬形石2・石製品・勾玉・管玉・小玉・鉄刀残片と木片などが出土しました。出土の三角縁神獸鏡と同範(同じ型)の鏡は京都府長岡京市長法寺南原古墳からも出土しており、全国に約10枚あることがわかっています。

☆石不動古墳（八幡市八幡石不動、前方後円墳、全長約88m）

1943年（昭和18）、梅原末治氏により調査され、葺石・円筒埴輪列を備え、後円部から2基の粘土槨埋葬施設を検出。北槨から画文帯神獸鏡1・碧玉製管玉1・ガラス製小玉81・鉄剣1・鉄刀約5・鉄鏃約30・刀子10余り・鉄鍬先1・鉄斧3・鉋2が出土。南槨は盗掘されていますが、確認される遺物は、画文帯神獸鏡1・碧玉製石釧3・同管玉40・滑石製棗玉29・鉄剣1・鉄刀1・刀子約20・長方形革綴短甲1・鉄鍬先1等。画文帯神獸鏡は2面とも中国鏡で、2世紀後半に作られたもの。うち1面は19cmを超す大型鏡です。画文帯神獸鏡は全国的にも200面ほどしか出土しておらず、2面以上副葬された古墳は数少なく貴重です。しかし、古墳は現在、その形状を備えていません。

☆八幡東車塚古墳（八幡女郎花、前方後円墳、全長約90m）

松花堂庭園内にあり、現在、原型が著しく損なわれ、規模がはっきりしません。墳丘からは円筒埴輪・葺石が確認されています。1897年（明治30）の宅地造成で、前方部が削

平され、埋葬施設から三角縁神獸鏡1面・剣1口が出土。1902年（明治35）、後円部にあつた粘土槨も発掘され、鏡（内行花文鏡（中国鏡）・龍鏡・変形八神鏡）・勾玉・管玉・鉄刀・鉄剣・素環頭大刀・鉄鏃・甲冑・鉄斧などの遺物が出土。さらに2022年、京都工芸繊維大学所蔵遺物中の四獣形鏡が当古墳出土のものとして認められ、鏡は計5面の出土です。

☆御毛通1号墳

前期末の築造と推定され、発掘調査で初めて発見された埋没古墳です。一辺20m前後の小規模な方墳ですが、周溝から蓋形埴輪が出土、希少な資料となっています。

☆美濃山王塚古墳

5世紀初頭、美濃山大塚に大型の前方後円墳が造られます。全長75m以上の美濃山王塚古墳です。二つの埋葬施設があり、鏡（伝十数面）・甲冑・鉄製武具など多くの副葬品が出土。紐跡の残る鉄鋌束は当古墳の被葬者が朝鮮半島と関りを持っていたことを窺わせますし、（君宜高官銘）内行花文鏡や夔鳳鏡など中国鏡は重要です。八幡市域ではこの古墳を最後に

大型古墳は造営されなくなります。

☆西二子塚古墳（美濃山西ノ口、円墳、墳長不明）、東二子塚古墳（美濃山幸水、円墳、10数m）

中期後半と推定されている小円墳です。西二子塚古墳からはガラス小玉16点、土玉16点、刀2点、鉄斧4点、砥石2点、土師器8点、須恵器5などが出土。東二子塚古墳からは銅鏡、鉄鏃、直刀、須恵器などが出土しています。

☆南山古墳群

男山（美濃山の丘陵上に南山古墳群（6基の円墳と1基の方墳）がありました。住宅開発により消滅。近年道路建設に伴う調査で7基目が発掘されました。一辺約15mの方墳。

☆その他の古墳

このほかに大芝古墳（八幡大芝、方墳、一辺約15m）、美濃山南東部に柿谷古墳、小塚古墳、内里池南古墳、荒坂古墳などがあります。

八幡の古墳編年表

| 西暦 | 男山 | 八幡 | 美濃山 | 主な古墳 |
|------|-------------|--------------|----------------------|---------|
| 250前 | | | | 箸墓古墳 |
| 300期 | | 中ノ山古墳 | | |
| 350期 | 八幡茶臼山古墳 | | | |
| 400期 | 右不動古墳 | 八幡西車塚古墳 | 御毛通1号墳、ヒル塚古墳 | 菅田御願山古墳 |
| 450期 | | 八幡東車塚古墳 | 御毛通2号墳、美濃山王塚古墳 | 大山古墳 |
| 500期 | | 大芝古墳 | 西二子塚古墳、東二子塚古墳 | |
| 550期 | | | 柿谷古墳 | 今城塚古墳 |
| 600期 | | | 女谷・荒坂塚群、田谷塚穴群、美濃山横穴群 | 五条野丸山古墳 |
| 650期 | | | | |
| 700期 | 西山庵寺（7世紀後半） | 花志水庵寺（7世紀後半） | 花美濃山庵寺（8世紀前半） | |

◆ 推しの二冊 ◆

『古文書返却の旅』

(網野善彦 著／中公新書)

上野卓彦

戦後の混乱期、水産庁が日本各地の漁業史関連の古文書を集め、資料館を設立しようというプロジェクトが始まった。そこに関わったのが歴史学者の網野善彦さんだ。

スタッフが全国各地に散らばり古文書を収集し、それを整理して筆写するというものだ。そして借りた古文書は持ち主に返却するというはずだった。しかしこのプロジェクトは中断してしまう。そのとき、主体となっていた日本常民文化研究所に集められた古文書はおよそ百万点。資料館の設立自体が破算になってしまったから、その貴重な資料はリンゴ箱に入れられたまま放置されてしまう。

網野さんはそれに対して、心痛め、少しずつ返却することを決意する。寄贈文書はあったものの、百万点の資料である。網野さんはこの返却作業に40年の歳月をかけて取り組んでいく。その模様がこの本に記述されている。

返却は苦難の旅になると覚悟したが、古文書を持って恐々と低姿勢で現地に向かい、相手に説明すると、「これは美拳です。快拳です。今まで文書を持っていつて返しにこられたのはあなたがはじめてです」という言葉が返される。

霞ヶ浦、瀬戸内海の二神島、能登半島、若狭、対馬と旅が続く。そこで網野さんは、その古文書を借りた当時のことを思い出す。何十年かの時が流れて、借りた当時の風景、漁業、現地の暮らしが大きく変貌していることに気づく。豊かな自然が失われ、利便性という名の一種の破壊行為が遂行され、文化が消滅していることに網野さんは悄然とする。だが、返却するために訪ねた先で、また新たな古文書が見つかる。網野さんはそこからまた始まるものがあると実感する。終わったと思ったところから始まった新たな旅である。

網野さんという方は、こつこつと誠実に動き回った人物なのだろう。文章からその人柄がうかがい知れる。苦渋や悔恨もあるはずなのに、それらは一切浮かび上がってこない。本から、昭和の日本の青空が見えてくる気がした。



『時の家』

(鳥山まこと 著／講談社)

上野卓彦

2025年度の第47回野間文芸新人賞を受賞し、その後2026年度の第174回芥川龍之介賞を受賞した鳥山まことさんの『時の家』は、一軒の家を中心に、そこに住み暮らす人たちのことが時間軸を跨ぐ形で描かれています。家と人の精神的な繋がり、住むことで心の世界に僅かだけ、たしかな情動の変化をもたららし、記憶の再生が起こり、物語が深く進んでいきます。しかも、時間が移動するのでその背景にある「家」がクローズアップされるといって、読んでいて不思議な遠近効果があります。

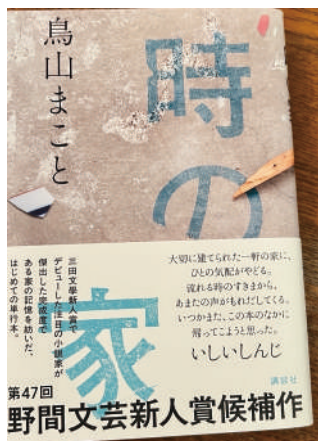
小説の中に「取手」が登場します。家の中にはこの「取手」や「へこみ」

や「縁」などが結構あり、住人はそれらを手で触れることによって物思いに耽ったり、空想したり、記憶を呼び戻したりします。建築士である鳥山さんにちりばめられていて、読んでいてこちらもどこかに触れてみてしまうような感覚になります。取手を握って開けると、小説の中の世界へ導きこまれてしまいそうな感覚です。

触れるということでは、たとえば、ギターやヴァイオリンなど手で触れるネックがある楽器を弾く方なら、自分の楽器ではないものに触れた時に感じる「差異」というものがあるでしょう。この触覚の差異がやがて馴染んでいくこと、これは手の指がその形を記憶するのか、ネックがこちらの指を受け入れるのか、能動なのか受動なのか、楽器の場合ならきつと「これだ!」という運命の出会いのように感じて、思わず高価なその楽器を購入してしまうのでしょうか。人間は時として、勘違いで手に入れるものがあると思います。その直感力が日々の暮らしを彩ることも大事なかもしれません。

『時の家』は、家が醸し出す香気、触感、気配、たたくまい、精神へへ

「の揺動など、さまざまなかを讀んでいて感じる小説です。登場する人物もそれぞれに共感を抱ける人びとや、出来事として記憶されている阪神・淡路大震災のことなど、小説の舞台が兵庫県の、とあるどこかの街であることがわかります。透視図のような繊細な文体で描写された情景に、いきなり柔らかな関西弁が飛び出してくるのですから、これも読者として愉しめると思いました。



『胃袋の近代

—食と人びとの日常史—

(2018)

(湯澤規子 著／名古屋大学出版会)

佐藤長作

歴史を紐解く学問は、経済活動や歴史上有名な人物などに光を当てたものが多いのですが、市井の人びとに光を当て、生き様を通して歴史を見る視点に重きを置いています。世の中を支えていたのは、名もなき一般庶民で、その生活を見つめることで歴史を紐解く学問につながることを示唆しています。

1920年(大正9)から1930年(昭和5)に日本の人口は、849万人増えて6445万人となりました。農林業従事者は、1500万人で変化なかったのですが、製造業従事者は、100万人増えて600万人、商業従事者は、180万人増えて880万人となりました。また都市に住む労働者は、391万人増え857万人となっています。この10年間で、製造業や商業に従事する人口と都市の人口が著しく増加したのです。

こうした変化に対応した食事の提供の形態も徐々に変化していきます。

1918年(大正7)調査では大阪市の一膳飯屋は458戸で、一日に5万6000人が利用していたようです。また、大阪市営の簡易食堂もありました。さらに、食堂を併せ持つ民営施設も存在していました。そして、公営食堂もつくられるようになります。

織物業界などの工場では、集団で食事をとるようになります。初期には飯場制という委託方式が採られていましたが、次第に工場の直営食堂へと変化していきます。共同炊事場から、いくつかの工場に食事を提供する共同組織も創られていきます。

農村と都市の間でも変化が生まれます。集団食と共同炊事は、農村での自給自足的な生産形態から、特定の農産物を、特定の地域で、集約的に生産する引き金になりました。食文化の洋風化も生産形態変化の新たな要因になりました。

農村と都市を結ぶ流通の課題もありました。大量の食料が生産されれば、それを集荷して流通させ分配することが必要になります。明治末期から大正にかけて「公設市場」が設置されます。生活必需品などを安く供給することで、公益を重視した「社会政策」としてありました。192

3年(大正12)「中央卸売市場法」が制定されます。大量生産、大量流通体制の確立を目指す「経済政策」へと方向転換します。

あとがきで、「食」と「人びと」と「地域」とのあいだに形づくられてきた歴史を知ることが、現代を問う直す行為である。そして近代は、胃袋の孤立化と集団化―都市への集中と産業の発展により―が同時に、かつ急速に進む時代であり、現代まで続く矛盾と苦悩のはじまりであると述べています。



『植物のいのち』

(田中修 著／中公新書)

佐藤長作

植物たちの存在なくして、私たち人間のいのちは保てません。

私たちが、ウシやブタ、ニワトリなどの動物の肉を食べていても、それらの動物が何を食べて肉をつつたかをさかのぼると、植物たちに行きつきます。

食べものを離れても、毎日の生活の中でも、私たちは多くの植物たちに取り囲まれて、ともに暮らしています。多くの種類の草花や樹木が、緑色の葉っぱで心を癒やしてくれ、季節ごとに色とりどりの花を楽しませてくれます。自然環境は、植物の存在なくして成り立ちません。

このように、私たち人間のいのちを支えてくれている植物たちは、現在、世界中に生育地を広げています。植物の祖先は、約30億年前に海の中で生まれ、約4億7000万年前に上陸しました。

では、植物たちが、どのように世界中に生育地を広げてきたのかに思いをめぐらせてください。たとえ人間が栽培するにしても、植物たちが世界中のあちこちの風土に適応し、

いろいろな環境に耐えられるような性質をもっていなければ、栽培することは不可能です。

植物たちが、現在のように世界中で生育し栽培されていくためには、いくつもの性質を変化させなければなりませんでした。

人間は植物の性質を改良できても、新しい性質をつくり出すことはできません。植物たちが、現在のように世界中のあちこちで繁殖するようになるには、植物たちは自分自身でいくつもの性質を変えらなければならない変革を遂げなければならなかったはずなのです。

これは、生命の誕生から現在の植物までの進化をたどる、壮大な歴史が問われているように思われます。

約30億年前からの植物の祖先の誕生や進化の歴史は、私たち人類が想像もできないほどの長い歴史を持っています。

この著書は、植物たちが自分自身の性質の変革を果たしながら、どのようにいのちをつなぎ、その生息域を広げてきたのか。植物の生態を学び「生きざま」を知る参考になるでしょう。



『現代政治の思想と行動』

(丸山真男 著／未来社)

中村たかし

——超国家主義の論理と心理——

戦争直後の1946年(昭和21)に発表されました。なぜ日本があの戦争へと突き進んでしまったのか、当時の日本社会や日本人の考え方にはどのような特徴があったのか分析しています。

西洋の国々では、法律は「外側のルール」であり、心の中で何を信じ、何を正しいと思うかは「個人の自由」であるという考え方が一般的です。しかし、戦前の日本(超国家主義の時代)では、「外側(国)」と「内側(個人の心)」の区別がありませんでした。天皇を中心とした国が、法律だけでなく「何が正しく、何が美しいか」という道徳や価値観まで決めていました。そのため、国民は心の中から国に従うことが求められ、国が認める価値観から外れることは「悪」と

見なされました。当時の日本では、全ての価値の源は「天皇」にあるとされ、これを丸山は、天皇を中心とした「巨大な家族のような国家」と表現しています。

誰かが「偉い」とか「正しい」とされる理由は、その人の能力や人格ではなく、「天皇にどれだけ近い場所にいるか」という位置関係で決まりました。軍人や役人は、天皇の権威を「背負っている」からこそ威張ることができ、国民もその権威に対して従いました。これを丸山は「権威への依存」と呼んでいます。丸山がこの論文で最も厳しく指摘したのが「無責任の体系」です。大きな決断をする時、誰が責任を持つのが非常に曖昧でした。上の人は「下からの突き上げがあつて、仕方がなかった」と言う。下の人は「上の命令だから、逆らえなかった」と言う。

さらに上の人は「自分もさらに上の(天皇の)お考えに従っただけだ」と言う。このように、みんなが「自分以外の誰かや状況」のせいにして結局、誰も「自分がこの戦争を決めた」という責任感を持っていませんでした。これが、当時の日本を暴走させた大きな原因の一つだと分析されています。

これは、人びとの心理を分析したもので、上の立場の人から押さえつけられてストレスを感じた人が、そのストレスを解消するために、自分より下の立場の人をいじめたり威張ったりすることを指します。

「上から受けた圧力を下へと順々に流していく」というこの連鎖が、日本社会全体を支配していました。一番下の国民までこの仕組みに組み込まれていたため、社会全体が軍国主義的な空気に染まっていったのです。丸山眞男は「一人ひとりの人間が、自分の良心に従って判断し、責任を持って行動する『個人の自律』がなかった事」が最大の問題だったと指摘しました。

国が個人の心の中にまで入り込み、人びとが自分の頭で考えることをやめて、ただ権威に寄りかかってしまった。その結果、誰もブレーキをかけられないまま、大きな悲劇へと向かってしまったのです。

この論文は、単に昔の日本を批判しているだけではなく、「周りの空気に流されていないか」「自分の責任で判断しているか」という、現代に生きる私たちにも通じる大切な問いを投げかけているように思います。



『昭和史』

(半藤一利 著／平凡社)

中村たかし

『昭和史』は1926年(昭和元)から1945年(昭和20)の終戦までの日本の歴史を、膨大な資料に基づいて冷静に描かれた労作です。当時の日本がなぜ、どのようにして破滅的な戦争へと突き進んでしまったのかという歴史の教訓を伝えていきます。

昭和初期に深刻な不景気と社会の混乱が始まります。政治家が国民の不満を解消できずにいた中、陸軍の一部が独自の行動を開始します。1931年(昭和6)に起きた「満州事変」です。これをきっかけに、軍部が政治に対して強い影響力を持つようになります。翌年には五・一五事件、1936年(昭和11)には二・

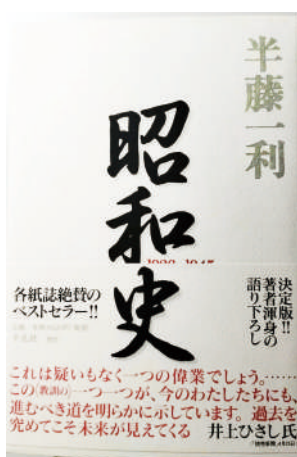
二六事件という武力によるクーデター未遂が起き、政治家が軍部を抑える力は失われていきました。

1937年(昭和12)、北京近郊での衝突をきっかけに「日中戦争」が始まりました。日本軍は「すぐに終わる」と予想していましたが、中国側の激しい抵抗にあい、戦いは数年にわたって続くこととなります。多額の戦費と多くの命が失われる中、日本は国際社会から孤立し、アメリカやイギリスとの対立も深まってきました。

アメリカから石油などの資源を止められた日本は、ついに1941年(昭和16)12月、「真珠湾を攻撃」して太平洋戦争を開始します。序盤こそ優勢でしたが、圧倒的な工業力を持つアメリカに対し、徐々に戦況は悪化していきました。ミッドウェー海戦での敗北を境に日本は後退を続け、空襲や原爆の投下を経て、1945年8月15日に無条件降伏を受け入れました。ただし、天皇が受け入れを表明しただけで、国際的には降伏文書調印が行われた9月2日が、終戦の日になります。

半藤氏がこの本で強調しているのは、「国民が冷静な判断を忘れ、一つの大きな流れに流されてしまうこと

の危うさ」です。当時の指導者たちは、客観的なデータよりも「精神論」や「根拠のない期待」を優先し、引き返すべきタイミングを見誤りました。また、新聞などのメディアも軍部による事実と異なる戦果を報道する、いわゆる「大本営発表」記事で国民の戦意をあおり、反対の意見を言いにくい空気をつくってしまったことが指摘されています。『昭和史』は、単なる過去の出来事の物語ではありません。現在を生きる私達が、同じ過ちを繰り返さないために「事実を多角的に見ること」の大切さを教えてくれる一冊です。歴史は遠い昔の物語ではなく、今の私達の社会と地続きになっています。



健康な土壌はどのように生成されるか

佐藤 長作

○腐植とは

植物がよく育つ場所の土は、黒っぽくて、生育が良いだけでなく収量も多いことが知られています。

黒く見えるのは、動物の遺骸や糞尿、植物の落ち葉や枯れ枝、根などの有機物が分解して、複雑な高分子化合物を生成しているからだと考えられています。この複雑な高分子化合物を腐植と呼んでいます。腐植とは、土壌に含まれている有機化合物の総称のことです。

この腐植が農業に重要であることに、いち早く着目したのが宮沢賢治でした。

腐植は、水捌け（透水性）がよく、保水力に優れ、植物への栄養素の提供に優れ、食物の生産性の向上に役立つ、気候変動に関しては土壌にカーボンをストックする機能を備えているといえます。どのようにして構築されるのでしょうか。

○腐植はどこに生成される

有機物が分解されて堆積する場所、

すなわち腐植が生成される場所は地表付近と考えられてきました。しかし、海外の研究成果では地表付近ではなく、地下50センチ付近に存在が確認され、腐植は地下で形成されていることが明らかになりました。

土壌の上部に大量の厩肥をすき込んで有機物が分解されても、2年後にはほとんど何もなくなってしまいます。地表付近には、腐植は見当たらないのです。

上層の分解層は、セルロースなどを分解する微生物が主に活動し、植物の根も少ない環境です。この下の30〜50センチの厚さまで広がる合成層では、養分を吸収する根を発達させ、根から分泌する滲出液で腐植が生成されます。

○腐植はどのように生成される

腐植は、これまで非常に長い時間をかけて有機物が分解されることによつて形成されるとの説が一般的でした。放射性標識炭素（炭素14）の移動を追跡することで、腐植は有機物の分解物ではなく、根からの滲出液でつくられることが明らかになりました。

根と共生して生きる菌根菌などの

糸状菌にとつての主なエネルギー源は、生きた根から分泌される滲出液です。糸状菌はその液を活用するとともに、その一部を微生物にも供給します。この過程で炭素は土壌中に移動します。滲出液を微生物の代謝作用によつて化学的に重合されてできるのが腐植なのです。

有機物は、酵素分解によつて低分子化する一方で、重縮合反応で巨大分子化する2つの反応がありますが、高分子化の方が主要な反応なのです。しかし、現在でも有機物の微生物による分解が自然現象の全てであるというような学説が主流とされています。

嫌気性状態における重縮合による炭素の巨大分子化が腐植形成のメインルートで、酸化分解は脇道であり、この錯覚は捨てなければならぬと研究者は指摘します。

この重縮合プロセスは、微生物の活動なしには実現できません。嫌気性微生物の関与が必要なのです。シアノバクテリアにより地球に酸素が現れますが、酸素は海水中に融け込んでいた鉄と反応して酸化鉄となるなど、地球の気候に始まり約25億年前からとされています。そのあいだ、嫌気性微生物が進化発達

しました。好気性微生物が現れたのはその後です。嫌気性微生物の歴史のほうが長いのです。

○腐植を生成する環境はなぜ重要なのか

私たちは長い間、有機物を微生物が分解して低分子化して土壌が豊かになると考えられてきました。実は、微生物によつて高分子化されることによつて土壌が豊かになってきたのです。微生物との共生の課題は、農業・農耕にとつても重要なのです。

腐植と微生物は、団粒構造をつくるうえで重要な働きをしています。現在、世界各地で団粒構造が失われ、土が締め固められています。そのため洪水被害が多発しています。生物がつくった団粒構造は、農業機械での耕起によるものとはつきりとした違いがあります。安定した耐水性のある団粒構造をつくれるのは、微生物以外にはありません。

化学肥料の使用は土壌微生物の多様性を減らし、結果的に団粒構造破壊の行為といえます。

参考文献：吉田太郎 シン・オーガニック（2024） 農文協

八幡俳句歳時記 27

俳句はおもしろい (5)

土井重悟

◆近代俳句の黎明

〜蛇笏、石鼎、普羅、久女

飯田蛇笏 (1885〜1962)

正岡子規・高浜虚子以降の近代の俳人を思い浮かべるとき、真っ先に蛇笏を思い浮かべる者は多いであろう。山梨県出身で早大中退。虚子に俳句を学び、「ホトトギス」同人となる。句集に「山盧集」「靈芝」などがある。剛直莊重な作風で知られるとある。

芋の露連山影を正しうす 蛇笏

この句には読者を厳肅な気持ちにさせるものがある。近景の「芋の露」から土の匂いが、遠景の連山からは朝日を逆光にした山の耀きが見渡せる。すると、「芋の露」が朝日に照らし出された玉の如くに感じられるのである。下五の「正しうす」が卓抜で、寡聞にして蛇笏の句以外で、「正しうす」の佳句を拝したことがない。

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

〃

風鈴は夏の季語。軽やかなイメージがするものだが、この句の風鈴は「くろがね」(鉄)の秋の風鈴である。ずしりと重そう。それが鳴ったのである。莊重な響きとして聞こえてきたのである。故に「鳴りにけり」なのである。

冬滝のきけば相つぐこだまかな

〃

厳寒の時節に山深い溪谷に分け入り、岸壁に張り付いたような滝にめぐりあった。滝は凍てつき氷の壁のようである。すると、森深くから、或いは遠い山並から木霊が次々に聞こえてくるのであった。

雲漢の初夜すぎにけりいしかはら

〃

「雲漢」は天の川。「初夜」は午後8時から9時ごろ。未だ夜更けでもなく周辺の集落の人びとが寝静まったわけでない。だが、聞こえてくるのは石の川原のせせらぎである。夜空には天空を覆うが如く煌めく銀河、地上には大小の石が散らばる川原。清澄な空気が辺りに張り詰める。

原石鼎 (1886〜1951)

石の俳句

島根県出身で、父は医院を経営していたとのこと。中学卒業後、幾度も受験に失敗し、1908年(明治41)、京都医学専門学校に入学。校内に句会を起し、明星派の歌会にも出席。だが、2年続けて落第し、放浪生活に入ったという。

頂上や殊に野菊の吹かれ居り

石鼎

「頂上」といっても野菊がゆれているのだから高山というものではない。だが、登頂感も手伝い気持ちよかつたのだろう。ささいな感興だが、句にしてみたくなったということだろう。中七から下五にかけての措辞がさわやかである。専門の俳人でなくても句づくりはできる。そんなことを示してくれる作品のようだ。

花影婆娑と踏むべくありぬ岨の月

〃

石鼎の放浪生活について、「西行芭蕉の生き方を継ぐもの、まさに伝統的な詩人の生き方」であるとの評価がある(『現代俳句大辞典』)。岨(絶壁)の月に映し出された花の影を婆娑と踏みながら苦吟する様は、求道者のイメージに重なる。

秋風や模様のちがふ皿二つ

〃

「模様のちがふ皿二つ」とは何か。放浪生活が長かったとあるから、低料金の旅館の食膳の景であることが想像される。模様も違う不揃いの食器を前にした作者に、秋風が身に沁みるのである。

一方で、この句は、取り合せの妙を教えてください。「秋風」と「模様のちがふ皿」は直接の繋がりはない。だが、五七五の短詩形に「取り合せ」の技法を採用することで、句に膨らみをもたらしてくれるのである。それは、句作りを趣味とする者にも大いに参考になる。

戸の口にすりっぱ赤し雁の秋

〃

「鶏頭や雁の来るときなほ赤し」(芭蕉)。こんな句が生れるほどに、鶏頭の花は「雁来紅」の別名があったという。だが、石鼎は、雁の秋に戸口の赤いすりっぱを副えた。「雁の秋」と赤いスリッパとは何ら関わりがない。まさしく取り合せの句であるが、しがな小市民の日常のなかで、高雅な精神に自己を高めようとする意志の片鱗が見える。

前田普羅 (1884~1954)

神奈川県横浜生まれ。「大正二年の俳句界に二人の新人を得たり。曰、普羅、曰、石鼎」と虚子に称賛される。富山へ転居し、季節の山岳を数多く詠んだことが知られる。私は富山生れでもあり、30代から50代にかけて飛騨・信濃・甲斐の山々を巡ったこともあるので親しみを覚える。

雪解川名山けづる響きかな 普羅

雪を溶かした清冽な水が溢れ、流れ出す音が響いてくる。「名山」と名の付く山は、自分も登ったことのある山なのかもしれない。中七の「名山けづる」が卓抜な表現。荒々しい山肌は氷河とともに、溪谷を流れる川がもたらしたものである。

春過ぎてそろそろ初夏の装いの頃

「山みな甲斐に走りけり」がおもしろい。「甲斐に走る」とは、山脈が甲斐に連なる意。山々を眺望する、気宇壮大な気分が伝わってくるのだ。

弥陀ヶ原漾ふばかり春の雪

「漾ふ」とは揺れ動くこと。春となり、豪雪で知られる弥陀ヶ原の雪原がまるで蜃気楼のように漾っているのだ。幻想的な景である。山本健吉は「上の十二字のおおらかな美しさに、心の陰翳を与え、感動的確さをもたらすものが、この(下の)五文字である」と述べる(『現代俳句』)。

杉田久女 (1890~1948)

鹿児島市生れ。東京女子高等師範学校附属高女に学ぶ。1916年から『ホトトギス』を読み、句作のほかに随筆も執り始める。1936年、日野草城らとともに突如『ホトトギス』同人を除籍される。「天や周囲の人々との軋に悩みながら昇華された作品の数々は、強い情念に支えられて珠玉の俳句となり、近代の女性俳句の先駆けとして大きい光芒を放つ」(『俳文学大辞典』)と評される。

花衣ぬぐやまつはる紐いろく

久女

初期の代表作。妖艶な情景、憂いを含んだしぐさをしつとりと詠みあげたように思う。また、字余りの下五は、心の問えをも示しているかのようだ。

「春雨の衣桁に重し恋心」と詠んだ虚子は「女の句として男子の模倣を許さぬ特別の位置」にあるとして、久女の句を称賛した。

笈して山ほと、ぎすほしま、

久女の句は、浪漫的な万葉調のものに句境を開拓していったと指摘される。「ほしま、」の表現に骨身を削ったとある。

夕顔に水仕もすみてた、ずめり

私は、久女と言えば先ずこの句を思い出す。目立たず、陰に咲く夕顔に自己を投影させ、水仕事を済ませ、佇むのであった。その時何を思うのか。

俳句であれ短歌であれ、むろん小説もふくめ、あらゆる文芸は、時代の在り様を示す。近代における女性の立場や環境を考える際、この句は、それを

象徴しているように思える。その意味では、女性解放の視点でとらえる意義があると思うのだ。

風に落つ楊貴妃桜房のま、

中国の美女楊貴妃の名のある桜。風に散るのでなく、房ごと地に落ちたのである。久女をナルシストとする解釈もあるが、社会や時代に翻弄された女の運命を思い浮かべるだけで充分ではないか。



協賛金のご協力をお願いします

(郵) 00940-8-196292 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会
(銀) 京都銀行男山支店 普通預金 4165224 NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会